



イイギリの木（研究所敷地内で撮影）

=北里大学北里研究所メディカルセンター病院 広報誌= 百合樹（ゆりのき）

＝第4号＝

地域における神経疾患診療の担い手として

「病院ができるのを待っていたんだよ」。

平成元年4月にKMC病院が開院して最初に内科外来に受診されたのは、筋萎縮性側索硬化症（ALS）の患者さんでした。ALSは運動神経だけが障害され、手足の麻痺と筋萎縮が進行し、次第に咽頭・喉頭筋麻痺により嚥下、会話ができなくなり、呼吸筋も麻痺する難治性の疾患です。既に進行した状態ですぐに入院していただきましたが、2カ月ほどの経過で呼吸筋麻痺に陥りました。

病院開設前までは、神経疾患の患者さんの多くは県南部、都内まで通院していたと伺い、神経内科に対する期待の大きさに身震いするほどでした。赴任して20年が経ち、病院の規模の拡大とともに多くの患者さんに接することができ、また近隣の医療機関からもご依頼をいただけるようになりました。診療の合間に患者さんのお宅に訪問する機会も与えられ、ご家族の方と直に接することもありました。家庭での介護は並大抵のことではありませんが、病院では見ることのできない、ご家族に囲まれた幸せそうな表情は何物にも代えがたいもので、ご家族の方から「この笑顔が見たいから頑張っているのよ」と聞かされ、ここに医療・福祉の原点があるのではと感ずることもあります。

神経疾患は難解で治療法が確立されていない疾患が多く、若い医師からも敬遠されがちですが、画像診断の進歩や病態の解明が進み、診断・治療が飛躍的に発展しつつあります。パーキンソン病では近い将来、原因遺伝子を直接脳内に導入する方法や、iPS細胞から作製した神経細胞を脳内移植する再生医療も可能になるでしょう。神経疾患の診療は、脳卒中の急性期治療から慢性期の管理、いわゆる神経難病（パーキンソン病、脊髄小脳変性症、ALS、多発性硬化症など）、認知症、てんかん、頭痛など幅広い疾患が対象となります。また、急性期から回復期リハビリテーション、慢性期管理への移行など、患者さんを中心として病院・診療所との連携（脳卒中連携パスなど）をますます充実させ、地域中核病院としての責務を果たさなければなりません。

私たち医療に携わる者は、患者さんから多くのことを学び吸収してきましたが、その成果を還元し、情報を共有することにより、患者さんと“一病息災”をとともに歩むような関係を築きたいと考えています。

『形成外科に行こう！！』

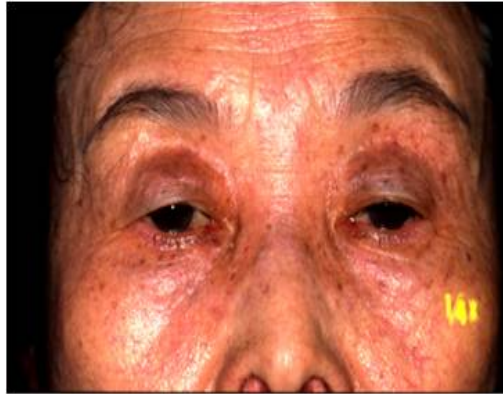
皆さん、『形成外科』って何するところか分かりますか？

美容整形？整形外科？！美容外科じゃないの？

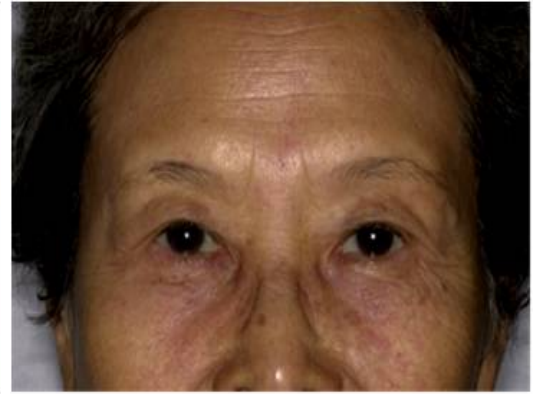
まず、整形外科と形成外科は全然違います。疾患によっては、どちらの科でも診ることがありますが、大雑把に言うと、皮膚・脂肪までの浅いもの（骨より上まで）は形成外科でも診ると思ってください。そして、美容外科は形成外科の中に含まれます。

形成外科では非常に幅広い疾患を扱っています。熱傷（やけど）、顔面外傷（顔のキズ、骨折など）、良性・悪性皮膚皮下腫瘍（ホクロ、イボ、脂肪のかたまりなど）、手の外傷（切断指の再接着、腱や神経・血管の縫合など）、先天奇形（みつくち、手足の奇形など）、難治性潰瘍（床ずれなど）、再建外科（乳房手術後など）、美容・・・などなどです。

当院では特に、眼瞼下垂症手術、美容医療に力を入れています。瞼が重くて見づらい、眼が疲れる・・・という方は、実は結構いらっしゃいますが、「眼瞼下垂」の可能性もあります。頭痛、肩こりの原因となっていることもあるので、思い当たる方はぜひご相談ください。手術で楽になるかもしれませんよ！！



眼瞼下垂症手術前



眼瞼下垂症手術後



シワを無くして若返り！

美容医療では、ボトックス注射、ヒアルロン酸注射がオススメです。ボトックス注射では、額、眉間、目尻などの表情シワの改善のほか、手足やワキの多汗症にも効果があります。ヒアルロン酸注射では、ホウレイ線や目の下のシワの改善や、鼻を高くする、アゴを尖らせる、厚いセクシーな唇にするなどを、切らずに、こっそり、早く行うことができます。

ふたえ手術、ワキガ手術（わずか数mmの傷で出来ます！）、フェイスリフトなども、その方に合った手術法を様々な術式の中から選択できます。十分なカウンセリングを行いますので、少し不安な美容医療も、大学病院で安心して受けていただけます。

その他、炭酸ガスレーザーによるホクロ・イボ取り、イオン&超音波導入、フォトフェイシャルなどを使用した美肌相談（シミなど）、ニキビ治療、巻き爪、ピアス、薄毛治療（AGA）、

脱毛など、様々な治療を行っております。

また、我々形成外科医は、縫合技術のトレーニングを十分に受けておりますので、傷跡がキレイなのも特長です。（傷跡がない訳ではありません。目立ちにくいのです）

さあ、これを読んで何か当てはまった方は、まずはご相談ください！！



矢沢真子（北里大学北里研究所メディカルセンター病院・形成外科医師）

診療部門の紹介 ～内分泌内科（糖尿病）より～

当科では主に糖尿病患者さんの診療に携わっていますが、高脂血症などの代謝疾患、甲状腺などの内分泌疾患の診療もおこなっています。この1年間の外来受診者数は1100人でしたが、定期的な通院患者さんは800人程度でしょうか。スタッフは常勤医1人、研修医3人、それに埼玉医大内分泌・糖尿病内科の犬飼准教授にもお手伝いいただき、私を加えて6人体制で月曜日から金曜日まで毎日糖尿病外来を行っています。

糖尿病は生活習慣病としての要素が強いものです。ですからその治療にあたっては患者さんの生活習慣をより健康的なものに変えていただくように支援することが大切であり、また生涯にわたって療養を続ける患者さんの心のケアも必要になってきます。そのためにはチーム医療が不可欠ですが、4年ほど前に看護師、栄養士、薬剤師、理学療法士、検査技師の方々の協力を得て「糖尿病療養支援チーム」を立ち上げることができました。心のケアに



「糖尿病教室」

関しては精神科の松井先生にもチームの一員としてアドバイスをいただいています。そして今年は学会の認定試験をパスした「糖尿病療養指導士」は14人にも達しました。また昨年度から本年度にかけてのメンバーによる学会や研究会での発表は10題になります。

昨年はチーム一丸となってノートPCを用いた糖尿病患者さんのための学習ツール「糖尿病北里塾」を作成しました。これはいわば糖尿病学習のためのホームページであり、「糖尿病とは」「食事療法」「薬物療法」「運動療法」、その他のコンテンツを各部

所で作成し、教育用ビデオやゲーム感覚で学ぶメタボ対策の市販ソフトなども取り入れてまとめたものです。ネット環境の無い病棟で、初級から上級レベルまでの患者さん個々に応じて学習のできる個人対応型のツールであり、糖尿病教室などの集団教育を補充するものとして役立っています。昨年の金沢での糖尿病看護学会で発表し、多くの関心が集まりました。今はさらに高齢者でも利用しやすいように、タッチパネル方式にして外来でも利用していただけるように作業を行っているところです。

チームの活動としては月曜日から金曜日にかけて各部所が担当する「糖尿病教室」、水曜日の病棟カンファレンスと回診、3ヶ月に一回の「公開糖尿病カンファレンス」、月に一回のチーム会議などがあります。病棟カンファレンスではメンバー内での患者情報の共有化や治療・支援方法などの意見交換を行っています。公開カンファレンスは近隣の先生方やコメディカルの方々にも参加していただき、講師をお招きしていろいろな分野の up-to-date なお話をいただいています。この9月で15回を数えましたが、毎回40～50人前後の参加者を得ています。



「病棟カンファレンス」における活発な議論

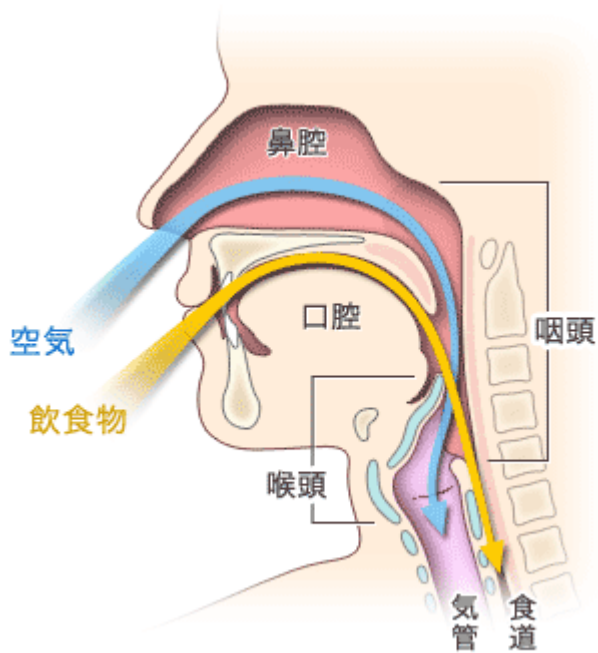
このようにしてメンバーのさらなるスキルアップをはかり、個々の患者さんへの適確なオーダーメイド治療や療養支援ができるように研鑽を続けたいと願っています。

鈴木 和男（内分泌代謝内科嘱託部長）



「飲み込み」よもやまばなし・・・

私たちが食べたり飲んだりする物は、のどを通して食道へと運ばれていきます。のどは「**食べ物の通り道**」であると同時に呼吸をしている「**空気の通り道**」でもあり、この2つの道は交差しています。



飲み込む（嚥下；えんげといいます）時は、一瞬、呼吸の道がふさがれて（呼吸が止まって）、食べ物や飲み物は食道へと運ばれていきますが、そのタイミングがずれてしまうと気管の方へ入ってしまうことがあります！

健康な人であれば、むせて咳をすることで気管へ入りそうになった食べ物等は外に出されます。しかし、咳をする力等が弱ってくると、むせることなく唾液や飲食物が気管から肺の方まで入ってしまい（誤嚥；ごえんといいます）、それが原因で「誤嚥性肺炎（ごえんせいはいえん）」を引き起こすことがあります。高齢者の肺炎は誤嚥が原因であることも少なくありません。

飲み込みにくい人も食材や調理法にちょっとした工夫をすると食べやすくなる場合もありますが、その方の

飲み込みの症状によって適する食事形態や姿勢等の工夫は異なります。うまく飲み込みができない為に、食事や水分摂取量が少なくなることも稀ではなく、これらを放っておくと、脱水や低栄養を生じ、体力が衰え、日常の活動量が低下するという悪循環を招きやすくなります。

気になる症状がある場合は早めに医師にご相談下さい。

江田真子・中野由紀（リハビリセンター言語聴覚士）



編集後記

新型インフルエンザの感染被害拡大が懸念されております。当院におきましては、発熱された患者様が病院建物への入館前に正面玄関入口においてインフルエンザ感染の事前チェック（トリアージ）を行っております。

「熱があるかな？」と思われたら玄関入口の電話をお取り下さい。皆様のご協力を誠に感謝致します。

今年もいよいよ師走となり、この広報誌「百合樹（ゆりのき）」も創刊1周年を迎えることができました。これからも一層、充実した紙面をご提供できるよう心がける所存です。皆様の温かいご支援を頂ければ幸いです。存じます。（倉）

発行者：北里大学北里研究所メディカルセンター病院
広報委員会

発行責任者：笹岡 大史

発行所：埼玉県北本市荒井 6-100

電話 （048）593-1212（代）

発行日：平成21年12月1日